

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2014年(平成26年)1月16日 木曜日

無料

第20号

毎月発行

創刊2014年(平成26年)1月16日 木曜日

【東北を世界にアピールするプロジェクト】
を立ち上げ、東北を活性化し、復興し、再興させよう
政府・行政が消極的、被災地がバラバラ等、復興が進展しない理由を並べ立てるだけではどんどん悪化の一途を辿る被災地の状況、この流れを反転させるため、逆転の発想の民間プロジェクトを立ち上げよう!

東北復興ビジョン

論議はどこへ
行つたのか

行政の硬直的な対応や復興予算不足・予算流用、被災地がひとつにまとまらないことなどで東北被災地復興がなかなか進まないという話は飽きるほどに耳にしていたが、そもそも「復興ビジョン」に関する議論はどこへ行つてしまったのだろうか?

復興は数年の事業ではないことは百も承知であり、超長期事業であり、そのためのビジョンが必要なのは言うまでもない。ビジョンという海図なしに復興事業

業という巨大な船はどこを目指そうというのか?

しかし、すぐにも「目の復興作業」も遅れているのに、原則論としての「復興ビジョン」を議論しても始まらないという声が聞こえてきそうである。

夢を持ってない

復興事業など
ありえない

誤解を恐れずに言うならば、震災前からの諸課題だけにとらわれている復興事業は、たとえすべてが順調に進行したとしても、東北の被災者はじめ東北住民に幸福をもたらすものとはいえない。せいぜい、周回遅れ、あるいは二周、三周遅れで「旧に復す」にすぎず、何年先か分からないが、事業終了時には関係者を大いに落胆させるであろう。「これだけのためにいままで苦労してきたのか」と。

復興ビジョンに夢が必要だというのは、時代を先取りし、復興事業終了時点でも時代の先端を走っているような計画のことである。それは単なる夢想ではなく、大胆な計画を包含した実現可能なビジョンでもあ

る。しかし、現況を突き抜けたような発想を見聞きすることは少ない。

それが打ち建てられれば、自然に人が集まり、事業が活性化していくものだ。一見して「回り道」に見えるが最終的には最善の

近道になるにちがいない。
夢はどこから
引き出すか
先人たちに学ぶ

そんなアイデアはどこにあるのかと問われそうだが、思い切つて、東北の先人たちの足跡を見習うべしと答えようと思う。

先人といつても、昭和や明治時代ではない。江戸時代だけでなく、もつと遙かな昔、奈良・平安時代、弥生・縄文の古代の先人たちである。

過去を忘れ、進歩したと思いがつた現代の東北人は、過去に学ぶことなど何もないというかもしれないし、古代東北人を遠い過去の人で、原始の人であり、現代とは無関係と見なすかもしれない。

しかし少し古代史を勉強すれば、それがとんでもない誤解であり、むしろ先人たちの業績を見直し、さらに掘り起こし、自分たちの発想が貧困化していることを反省すべきだと思う。

現代の東北人の思い違ひの原因はいろいろあるだろうが、ひとつには、東北古代史が未発掘のまま放置されていることもある。あるいは時の権力者が東北の歴史を改ざんしたこともあるだろう。

しかし何より、幼少時から教えられた改ざん東北古代史に疑いも持たずに、そのまま受け入れているから

歴史掘り起こしの時

東北古代の歴史に関する事柄に関しては文字情報が極端に少ない。とはいえずにさまざまな形で残された遺跡、遺物、地名、伝統芸能などに託された記憶、言い伝えなどから、過去の歴史を鮮やかに蘇らせることは可能だ。

さらに近年の考古学の発見、歴史とは一見無関係に見える古代の気象学、植物学などの成果で、従来の歴史観が大きく変貌を遂げていることも確かである。

また大学の研究者だけでなく、市井の研究者の研究成果に見るべきものも増えてきている現実がある。彼らの提示する研究は、従来の手あかのついた古びた歴史を覆すケースもたびたびである。東北の古代史も例外ではない。

古代からグローバルな視点を持つ東北

東北の戦国武将・伊達正宗が「世界」を見ていたことはほとんどの人が知っている。サン・ファン・パウティスタ号で遣欧使節として支倉常長をヨーロッパに派遣したことがそれである。しかし、戦国時代は終

わりを告げ、あだ花となつてしまった。今となつては正宗が夢見た世界との関わりがどんなものかを想像するのはむずかしい。

それ以前にも世界を見て

いた東北のリーダーはいた。平泉の奥州藤原氏が、実は北方や中国などの海外交易で富を築いたことはあまり知られていない。

いやもつと昔から、東北にはグローバルな交易が存在した。アテルイもそうである。さらに縄文時代の東北もそうであったらしい。何千年にも亘り、東北は北方交易の拠点であったのだ。

いま復興にあたって、なぜ、その伝統ともいえるグローバルな考え方を取り戻そうとしないのだろうか。

東京経由の発想を切り離し、いきなり世界へ

かつて江戸や京都、大和朝廷経由ではない海外交易が東北にはあった。それを踏襲すればよいのだ。つまりは、東京経由で世界に打つて出るのではなく、いきなり世界に向けてさまざまなプロジェクトを発信すればよい。

時代が下り、明治、昭和になり、平成になつてから、あまりにも萎縮した思考回路に染まつてしまったとはいえないだろうか。

戊辰戦争敗戦以降の自虐的図式を捨てる

萎縮した思考回路といえ、戊辰戦争以降現代まで続く、敗者意識、被害者意識、中央へのひがみ、自虐的な東北像を後生大事に温存していることを東北人は

ほとんど意識していないが、まちがいくそれに縛られていると思う。

この図式のなかで発想する限りは、東北の復興が成功する可能性は小さいし、活性化も、ましてや東北再興などおぼつかないと言わなければならない。したがってこの図式を早々に打破すべきである。

お金より人を集める

昨年、東北復興予算に関する話題でにぎわつた。予算の流用であり、予算の未消化問題などである。

しかし、東北の復興にとつて最も大事なことは、お金よりも何よりも、全国から、あるいは世界から人材が集まることである。

その集まつた人材から、積極的に、多くの知恵と工夫とアイデアを借りることである。間違つても、外部の人間に東北のことが分かるはずはないと、はなから拒絶してはいけない。

それと、外部の人材に、東北人が気づいていない東北の魅力を発掘してもらうことである。未発掘の東北文化、東北のアート、東北の食文化、東北の観光など、東北は資源の宝庫である。

これを発掘し、育て、事業化して東北の復興、活性化、再興へとつなげることがい

ま求められていると痛切に感じる。当新聞も、この考え方を現実化すべく、下記のようなプロジェクト設置に尽力したいと考えている。

どんなプロジェクトを企画するのか

- プロジェクト企画の大前提として、戊辰戦争敗戦以降現代までも引きずる敗者の意識、中央へのひがみ、被害者意識と自虐的東北像を捨てる
- 東京を経由して世界を目指す二段階方式ではなく、いきなり世界へ挑戦するプロジェクト
- 東北人自身によるテーマ掘り起しではなく、外部の人間に、外部の眼で魅力を発見してもらう
- 従来の東京発・日本発の手法とは異なつた方法、東北発のオリジナル手法で事業化する
- プロジェクトの分野候補は、未発掘の東北文化、東北アート、東北の食文化、東北の観光など

どんな方法で実現していくのか

- 大量資金が必要な巨大なインフラ事業などを狙わず、夢のある事業で、かつ出来るところから開始する
- ボランティアではなく、完全な営利事業とする
- 民間資金限定プロジェクトとし、行政の関与をまったく受けず、自由奔放に活動する
- 極力お金をかけない、人的ネットワークを最大限に集約することでコストを吸収する
- 人もモノもカネも東北内に限定せず、東京その他国内、海外の外部を拒まず、「外」と積極的に連携する
- 当新聞が、人的ネットワークの基点となり、つなぎ目の役割を担う
- 8面にプロジェクト企画の募集要領を掲載しました

「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」その⑧ 「大和朝廷と蝦夷攻防の多賀城」

蝦夷の頭領・伊治皆麻呂(コレハリノアザマロ)による多賀城制圧を思い起こしつつ、史跡・多賀城とアラハバキ神社、東北歴史博物館再訪

大雪で取材予定 大幅変更余儀なく

年末であわただしい十二月半ば、連載企画「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」のための二日間の取材を予定した。

一日目は、宮城・多賀城を訪ねる予定であった。古代信仰をいろいろ追跡していたところ、これまで謎の神のままに放置していたアラハバキの謎が解けそうだったので、以前訪問した多賀城のアラハバキ神社を再訪したいと強く思ったのだ。

それと、いつも素通りばかりしていて、じっくり訪問しなければならぬと思っていた史跡・多賀城もあらためて探索したかった。

これら二つの理由から、多賀城行きを決めた。

二日目は、宮城県を北上し、大崎市にある古墳時代の古墳群を探検し、その足で東に向かい、筆者の生まれ故郷である涌谷町の縄文貝塚、古墳時代の遺跡も回るという計画であった。灯台もと暗しのたとえ通り、筆者の故郷の周辺の古代遺跡の探索などかつては思いもつかなかったが、調べれば調べるほど、興味深い地域であることが分かって、まだまだ探索は続きそうである。

しかし後述のように、突然の吹雪で二日目の予定はすべてキャンセルとなってしまった。一日目の取材を終えていたので、かろうじて記事にまとめることができたのが幸いだった。

巨大な大和朝廷の 出先機関「多賀城」

史跡・多賀城に行つて見



多賀城の全体図



政庁復元模型



列柱復元



石敷き道路



陸奥総社宮

れば一目瞭然だが、とにかく広い。歩いて回るのは大変である。(写真参照)

現在、建物跡、復元された列柱、礎石、石敷き道路などしか残っておらず、再建された建物がないので、その大きさをイメージするのがむずかしいが、巨大である。

この大和朝廷の出先機関には、政庁やその他行政施設を中心に、周辺には宗教施設などがあり、巨大な政府といった陣容である。また、ここには当時、多くの兵士もいたであろう。アテルイの時代には、都から数万人規模で攻めてきて、ここを拠点の一部としても活用したであろうから、それなりの規模は必要

だった。かつ奈良・平安初期にかけては、東北の蝦夷の勢力が脅威であり、それを圧倒するための施設である必要があったこともあるだろう。多賀城を境に、ここは永年、両陣営の勢力拮抗の場であったことは史実であり、多賀城から南は朝廷勢力が優り、北は蝦夷の勢力が優

勢という時代が長く続いた。この多賀城に戦いを仕掛けて、一時制圧したが、アテルイに先立つ蝦夷のリーダー、伊治皆麻呂(これはりのあさまろ)である。アテルイに比べると知名度は低いし、矮小化されているが、ジワリジワリと侵

攻してきた大和朝廷に対し反旗を翻し、長期に亘る戦端の火ぶたを切ったのは皆麻呂であり、もつと大きく取り上げられてしかるべきである。この多賀城遺跡を歩き回り、その大きさを体験すると、この拠点に戦いをしかけるといえることがどんなことなのか実感できる。

そして伊治皆麻呂というリーダーの大きさも勇気も納得できるし、そしてそうせざるを得なかった当時の朝廷対蝦夷の状況がかなり緊迫していたことも容易に想像できる。ましてや、皆麻呂は、蝦夷とはいえず、国府に仕える身であり、官位も授かっていた。それなのに反旗を翻したのだ。余程の訳があったに違いない。

いずれにしても、この伊治皆麻呂はもつと注目されて良い。蝦夷の頭領はアテルイだけではない。

アラハバキ神社再訪

多賀城のアラハバキ神社は第3号(2012/8月号)でも取り上げた。そのときには、この神がどのような神であるかは謎と記載した。とはいえ、その後、ずっと引っかかっていた。

昨年秋、日本の古代信仰に関するある書籍を読んだ

と、その中にアラハバキ神社の神について詳しく書かれていた。その中で、アラハバキ神社の神は、多賀城の守護神として祀られていたと記されていた。その神は、多賀城の守護神として祀られていたと記されていた。その神は、多賀城の守護神として祀られていたと記されていた。



アラハバキ神社 鳥居



拝殿



男根



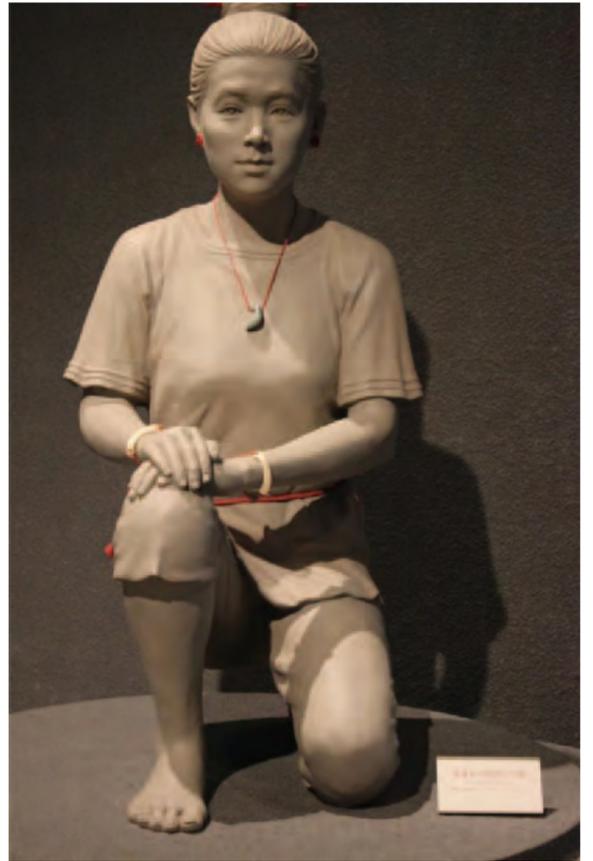
神さま、仏さまの復興展

いたところ、このアラハバキ神の由来について有力な根拠が示されている箇所に出くわした。ワクワクした。それでどうしても再訪したくなったという訳である。その発見により、アラハバキは、以前よりずっと身近に感じられた。無性に行きたくなった。

古代の神アラハバキ

筆者の尊敬する日本古代史研究科の故吉野裕子氏によれば、アラハバキ神は謎

の神であることは確かだが、さぐる手がかりとしては、伊勢神宮内宮御敷地に祀られているハハキ神(波木神)があり、その神は土地の守護神という。また、これも由緒が判然としないうちにこのハハキ神とをつなぐものとしてアラハバキ神をおくと、これらの神々の本質も明らかになるのではないかと。そして、ハハキ神(波木神)↓頭(あら)波木神(内から外へ顕現したハ



縄文美人

ハハキ神) ↓荒(あら)波木神 ↓荒神という関係が成り立つのではないかと推理する。傾聴に値する。

東北歴史博物館再訪

多賀城散策、アラハバキ神社参拝でもなお時間が残ったので、東北歴史博物館



2万年前はほぼ大陸と地続き

筆者はいま、縄文文化に惹かれている。いろいろ書籍研究はしているが、縄文

東北縄文の世界

また、縄文時代に先行する新石器時代の二万年前は大陸とつながっていたの

を再訪した。ちょうど、「神さま、仏さまの復興」という企画展があった。それと、最近夢中になっている東北の縄文に関する展示もあらためて見たかった。常設展示場を入ってすぐのところ、縄文時代の女性像がある。二度目の対面で、馴染みとなった像にまた出迎えてもらっているという感覚になった。シンプルな服装だが、おしやれであり、アクセサリーも身につけている。整った顔、楚々とした姿。嫌みのない女性。この像により、とても縄文時代を身近に感じることが出来る。今後はぜひ「ひいき」にしよう。

か、縄文人がどのような食物を食べていたか、土偶にはどんな意味があるのかなど興味がない。日本人の精神の基層に縄文の心があると言われるが、現代とどういう接点があるかを追跡し、つながりを実感したいと常々思っている。そのためにはこはうってつけの場所である。



初日に降り始めた雪



2万年前の仙台近辺



一夜明けて雪景色



縄文時代の食料—木の实

雪から吹雪へ 取材一日目の夜から雪が

舞い始めた。すぐに一面の雪景色となった。それでも翌日になれば、雪も止み、溶けて、取材は大丈夫だろうと高をくくっていた。その日は、大崎市に宿泊したが、明け方、ものすごい風の音で目が覚めた。そして窓のカーテンを開けてみてびっくり。猛吹雪であった。取材はすぐあきらめた。車での移動を予定していたが、とても運転できる状況ではない。帰京の足も心配になってきた。幸い東北新幹線は通常通りの運転中止になるか分からない。とりあえず、帰ることに決め、すべての予定をキャンセル。遺跡は逃げない。近いうち再挑戦しよう

た。雪で早々に退散しよう東北新幹線・古川駅の改札口に入ってしまうところに、何と「釜神(かまがみ)さまの集団」が並んでいた。「釜神さま」とは、文献もなく起源も不明であり、分布地域もほぼ旧仙台藩領に限られている。「かまど」を大切にし、火の守り神、魔除けの神として、いかめしい面である。台所の「かまど」の上や土間の柱に祀られ信仰されてきたが、現代では「かまど」そのものが希少価値である。さらに驚いたのが、すべて地元の高校生の作品のようだ。こうした形で、地域の伝統が維持されていることに感激し、取材を終えた。



大崎市の高校生作—釜神さま

藤沢町40年の歩みに見る 住民自治

地方の課題に先に 直面していた藤沢町

岩手県南部に藤沢町という町があった。今は合併して一関市の一部となっている。山あいの小さな町である。仙台から行くと、新幹線で一関まで三〇分前後、そこから藤沢町まではバスで約一時間掛かる。だから、一関市中心部に行ったことのある人は多くいても、そこから藤沢町まで足を伸ばした人はそれほど多くないだろう。もっとも、岩手サファリパーク、館ヶ森アーク牧場、キリシタン殉教公園といったスポットがあるので、それらを訪れた人はいるかもしれない。

しかし実は、藤沢町は知る人ぞ知る、住民自治のモデルケースの一つとしてよく取り上げられる町である。しかもその歴史は四〇年近くに及ぶ。おおよそ地方自治を本格化たらしめる

ための地方分権が本格的にクローズアップされたのは、一九九五年の地方分権推進法成立以降である。その四半世紀も前に、藤沢町では住民参加による自治が始まっていた。これは特筆すべきことである。

いったいどうしてそのようになれたのか。藤沢町をひも解いてみると、藤沢町には本当に已むに已まれぬ状況があったことが分かる。藤沢町は一九五五年に旧藤沢町と周辺の三つの村が合併して誕生した。当時の人口は一六〇〇〇人を超えていたが、その後急速に過疎化が進み、一九七一年には過疎地域の指定を受けた。一関市と合併する直前の人口は九〇〇〇人を割り込んでいた。現在、多くの地域で高齢化と人口減少が課題となっているが、藤沢町は既に四〇年も前に同様の現実を直面していた。そして、こ

の課題を解決するために始まったのが、住民自治の仕組みであったのである。私がこの藤沢町のことを知ったきっかけは、国民健康保険藤沢町民病院(現・一関市国民健康保険藤沢病院)の存在である。この病院は二〇一一年まで一七年連続黒字決算で、二〇〇八年には自治体立優良病院として総務大臣表彰も受けている。全国の多くの自治体立病院が慢性的な財政赤字に苦しむ中、山あいの五十四床の小さな自治体病院がなぜ一七年連続で黒字経営を成し得ているのか、ということに最初に興味を持った。

藤沢町には、県立病院が一九六八年に廃院して以来、病院がなかった。当時、住民の実に八割が町外の病院に搬送され、そこで最期を迎えるという現実があった。そこで藤沢町は病院建設計画を打ち出した。予想される経営困難を理由に県や国は計画に猛反対し、容易には実現しなかったが、町の努力が実り、県立病院廃院から四半世紀経った一九九三年に藤沢町民病院が誕生した。いざふたを開けてみたら、経営困難どころか黒字経営を続けて今に至っているのである。

そのことに大いに注目したのであったが、実際に藤沢病院の病院事業管理者で院長の佐藤元美氏にお会いしてお話を聞いてみたら、黒字経営はあくまでも結果であって、その取り組みの内容こそが特筆すべきものだということがよく分かった。

過疎地域にあり、藤沢病院が町で唯一の病院であるという事情から、藤沢病院は保健・医療・福祉を一体化して提供する「地域包括ケア」に先進的に取り組んでいた。毎年夏に開催する、宿泊を伴う「地域医療セミナー」には全国各地から多くの医療関係者が集い、藤沢病院の先進的な取り組みを学んでいく。

様々な取り組みの中でもとりわけ目を引いたのが「地域ナイトスクール」と呼ばれる、病院職員と地域住民とが直接対話する場づくりである。病院職員はそこで地域住民の病院への意見や要望を聞く。一方、地域住民は病院職員が日々何を考えて医療に取り組んでいるかを知る。そうした相互理解を促進する場であると共に、地域住民の病院運営への参加の場ともなっている。黒字経営の要因は多くあるが、この「地域ナイトスクール」によって、絶えず地域住民のニーズを的確に把握し、それに応える医療を提供してきたこともその大きな要因の一つである。そしてまた、こうした「地域ナイトスクール」のような試みが地域住民に受け入れられる余地があった

のは、この町に住民自治が着実に定着していたが故のことであると言える。

町唯一の病院に見る 先進性

では、藤沢町ではどのような住民自治が行われているのだろうか。町内に四三ある行政区すべてに「自治会」を設立した。各自治会には役場から地域担当職員を派遣、自治会の住民と役員は地域懇談会を開催、住民から出された要望やアイデアを「ミニ地域開発計画」としてまとめた。各自治会の「ミニ地域開発計画」は全自治会が参加する藤沢町自治会協議会の場にもちより、議論して優先順位づけなどを行う。町は協議会から提出された案に基づいて総合開発計画を策定し、予算化する、といった仕組みである。

この仕組みの下では住民は、自分たちの要求だけを主張していればよいというわけにはいかない。同じように出された他地域の要望も見ながら、全町の見ても項目の優先順位が高いのかについての判断を迫られる。各自治会から出された計画に基づいて町の計画が策定されて予算も決まるとなれば、自分たちの声が行政に反映されるのと同じように、そこには相応の責任も生じる。

こうした仕組みを支えるための仕掛けもあった。最初に行ったことは「研修バス」を購入したことであったという。物見遊山の旅行ではない、住民と役員職員が他地域に出掛けて学習するために使うバスである。そもそも住民と役員職員が同じバスに乗って視察に行くという形も珍しいが、それも共通の知識の上で議論をするという土台作りに役立った。また、町内では住民向けの研修会も活発に行われた。人材育成がこの仕組みの肝であったことが窺える。

話し合いの中では、どこまで行政が担い、どこまでを自治会が担うかという役割分担も議論された。就職

希望のケルン(「まちの総合情報誌ふじさわ」2011年5月号より)

の四〇年に亘る取り組みが何よりの参考になると強く思うのである。過疎化に対応したその仕組みは、人口減少時代を迎え、高齢化が進展する現在にもマッチするものであると言える。

ただしここで、この仕組みを導入したことが即現在の課題解決に直結すると考えることには慎重であるべきである。印象に残った佐藤守氏の言葉を紹介したい。氏はこう言った。

「我々は受益者にはなれない。作った人が受益者になるというのはなかなかないものだ。今、我々は一〇〇年前に作ったもので生かされているのだ。今やっている我々も一〇〇年後の住民に対する負託者となる。そう思っしてほしい」

目先の利益にとらわれることなく、中長期的な視野に立って地域に何が必要かを考えることが、一〇〇年後にも続く地域を作るために必要なことであるのである。

旧町役場の前に、「希望のケルン」と名付けられた記念碑がある。一九九〇年に、当時の全住民と四三自治会が持ち寄った石を積み重ねて造られた四角錐型の碑である。「石」は「意志」に掛けられ、町づくりにさらに挑む全住民の意志を形にしている。この、町づくりに取り組む意志、特に同様の地域を多く抱える東北において、一つの範として見習いたいものである。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

藤沢町の画期的な 住民自治

では、藤沢町ではどのような住民自治が行われているのだろうか。町内に四三ある行政区すべてに「自治会」を設立した。各自治会には役場から地域担当職員を派遣、自治会の住民と役員は地域懇談会を開催、住民から出された要望やアイデアを「ミニ地域開発計画」としてまとめた。各自治会の「ミニ地域開発計画」は全自治会が参加する藤沢町自治会協議会の場にもちより、議論して優先順位づけなどを行う。町は協議会から提出された案に基づいて総合開発計画を策定し、予算化する、といった仕組みである。

この仕組みの下では住民は、自分たちの要求だけを主張していればよいというわけにはいかない。同じように出された他地域の要望も見ながら、全町の見ても項目の優先順位が高いのかについての判断を迫られる。各自治会から出された計画に基づいて町の計画が策定されて予算も決まるとなれば、自分たちの声が行政に反映されるのと同じように、そこには相応の責任も生じる。

こうした仕組みを支えるための仕掛けもあった。最初に行ったことは「研修バス」を購入したことであったという。物見遊山の旅行ではない、住民と役員職員が他地域に出掛けて学習するために使うバスである。そもそも住民と役員職員が同じバスに乗って視察に行くという形も珍しいが、それも共通の知識の上で議論をするという土台作りに役立った。また、町内では住民向けの研修会も活発に行われた。人材育成がこの仕組みの肝であったことが窺える。

話し合いの中では、どこまで行政が担い、どこまでを自治会が担うかという役割分担も議論された。就職

希望のケルン(「まちの総合情報誌ふじさわ」2011年5月号より)

の四〇年に亘る取り組みが何よりの参考になると強く思うのである。過疎化に対応したその仕組みは、人口減少時代を迎え、高齢化が進展する現在にもマッチするものであると言える。

ただしここで、この仕組みを導入したことが即現在の課題解決に直結すると考えることには慎重であるべきである。印象に残った佐藤守氏の言葉を紹介したい。氏はこう言った。

「我々は受益者にはなれない。作った人が受益者になるというのはなかなかないものだ。今、我々は一〇〇年前に作ったもので生かされているのだ。今やっている我々も一〇〇年後の住民に対する負託者となる。そう思っほしい」

目先の利益にとらわれることなく、中長期的な視野に立って地域に何が必要かを考えることが、一〇〇年後にも続く地域を作るために必要なことであるのである。

藤沢町の地域包括ケアの拠点藤沢病院

話し合いの中では、どこまで行政が担い、どこまでを自治会が担うかという役割分担も議論された。就職

希望のケルン(「まちの総合情報誌ふじさわ」2011年5月号より)

の四〇年に亘る取り組みが何よりの参考になると強く思うのである。過疎化に対応したその仕組みは、人口減少時代を迎え、高齢化が進展する現在にもマッチするものであると言える。

ただしここで、この仕組みを導入したことが即現在の課題解決に直結すると考えることには慎重であるべきである。印象に残った佐藤守氏の言葉を紹介したい。氏はこう言った。

「我々は受益者にはなれない。作った人が受益者になるというのはなかなかないものだ。今、我々は一〇〇年前に作ったもので生かされているのだ。今やっている我々も一〇〇年後の住民に対する負託者となる。そう思っほしい」

目先の利益にとらわれることなく、中長期的な視野に立って地域に何が必要かを考えることが、一〇〇年後にも続く地域を作るために必要なことであるのである。

旧町役場の前に、「希望のケルン」と名付けられた記念碑がある。一九九〇年に、当時の全住民と四三自治会が持ち寄った石を積み重ねて造られた四角錐型の碑である。「石」は「意志」に掛けられ、町づくりにさらに挑む全住民の意志を形にしている。この、町づくりに取り組む意志、特に同様の地域を多く抱える東北において、一つの範として見習いたいものである。

藤沢町方式を 一つのお手本に

藤沢町での住民自治の取り組みは、今この時期、地域にとって大いに参考にす

べき事例だと強く思う。道州制下における基礎自治体の役割についてはいろいろと議論がされているところであるが、その大きな役割として道州制基本法案では、「住民に身近な地方公共団体として、従来の都道府県及び市町村の権限をおおむね併せ持ち、住民に直接関わる事務について自ら考え、自ら実践できる地域完結性を有する主体」とあるが、「住民に直接関わる事務について自ら考え、自ら実践」するためには、住民のニーズを把握し、それに基づいた施策を講じることが不可欠である。そのためには、住民のニーズをすくい上げるのできる仕組みが必要となるが、藤沢町で

見習いたいものである。

見習いたいものである。



藤沢町の地域包括ケアの拠点藤沢病院

話し合いの中では、どこまで行政が担い、どこまでを自治会が担うかという役割分担も議論された。就職

希望のケルン(「まちの総合情報誌ふじさわ」2011年5月号より)

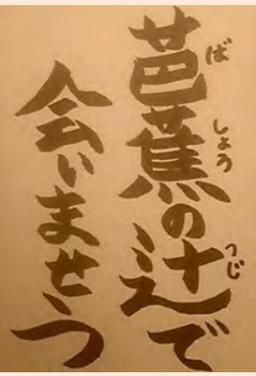
の四〇年に亘る取り組みが何よりの参考になると強く思うのである。過疎化に対応したその仕組みは、人口減少時代を迎え、高齢化が進展する現在にもマッチするものであると言える。

ただしここで、この仕組みを導入したことが即現在の課題解決に直結すると考えることには慎重であるべきである。印象に残った佐藤守氏の言葉を紹介したい。氏はこう言った。

「我々は受益者にはなれない。作った人が受益者になるというのはなかなかないものだ。今、我々は一〇〇年前に作ったもので生かされているのだ。今やっている我々も一〇〇年後の住民に対する負託者となる。そう思っほしい」

目先の利益にとらわれることなく、中長期的な視野に立って地域に何が必要かを考えることが、一〇〇年後にも続く地域を作るために必要なことであるのである。

連載
むかしばなし



第八話
これが、さあかす

「あれは三年前、大正から昭和になった年の冬の事でした。私は東京へ向かう汽車に乗ったのでしたが」

北山丘陵を目前にして、宮澤賢治は佐々木喜善に語っている。

「その時は、仙臺さ立ち寄る予定はありませんでした。夜汽車でしたから、席で眠りかけたのですが、気がつくといは芭蕉の辻の真ん中に横たわっていたのです。」

あまりに唐突な話の展開に、喜善は呆気にとられた。「しかも、十字路の四方に



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

と口々に呟いている。と思ふと、目を黒布で覆った娘が何か感じ入ったように言う。「こんなもの、見た事がない。」「すると次に、他の娘らが一斉に身体をびくりと震わせて、各々あらぬ方向に視線を向けながらまた口々に「すごい」「何だこれは」「これが、さあかす。」「と囁き合うのだった。「こ、これは一体?」

「明日辺り、この地を大軍が蹂躙致すのですが、動かれぬのでござるか。」芭蕉が女の一人に尋ねると、その女は返事をせず、別の娘が横から答えた。「恐るるに足らぬ。来るなら来るがいい。」

先程とは別の娘だが、声が全く同じに聞こえる。そう言えは、目元も皆同じに見えるのだった。「威勢いい娘共だごとな。一人くれえうちのサーカスさ欲しいもんだ。」

賢治が歩きながらこっそり尋ね、喜善応えて云わく、「先程、質問に答えない娘がいましてが、おそらく彼女らのある者は目が見えず、ある者は耳が聞こえず、ある者は口がきけないのです。」

『八重の桜』と、えみし考

スタッフに技術、実話としての素材の良さ、そして決して偽物ではない志という条件が揃ったのか、結果は予想以上の成功となったのではないだろうか、と思われる。確かに最も重要なドラマの骨子として、東北人の強さ、優しさを伝え、歴史的真相に迫ろうという表現者としての使命感を鼓舞する重厚なテーマがあつて、かつて「中央の」放送局がここまで東北側の視点で描写してくれた事があつたかという驚きと感動を覚える事も少なくなかった。

「天皇」に反旗を翻した訳ではなく、寧ろ全く逆であつた。濡れ衣を着せられたからには、名譽は回復されなくてはならない。反面、この論理には根柢から強烈な矛盾が秘められている。即ち、東北人はもともと天皇の治める国とは別の世界の住人だつた。つまり、天皇に従わない事自体は逆賊でも何でも無い。元より、天皇は東北人にとつて君主ではないのだから。

「天皇否定」は「実は誰よりも勤王であつた」会津を描く『八重の桜』を否定するだろうか? また、先の大震災の後、高齢を押しつけて被災地の仮設住宅を訪問し続けた現天皇を否定するだろうか? 両方に共通するのは、東北人が対面し敬愛した天皇とは、あくまで「個人」であつたという事である。しかし天皇とは時の権力者が掲げて政治利用する、

「あるようで実はない存在」「個人であつて個人ではない存在」である事を、忘れてはならないだろう。かつての全体主義的な国家の再生を目論むと言われ、現安倍政権は、日本人が天皇を頂点として敬うのは当然と主張するが、よく知られているように特に沖縄県においては、それは決して当然の事ではない。現地歌壇に、こんな歌がある。

長い年月を以つてしても、日本はそのアイデンティティを奪う事に成功しなかったのだ。では、東北はどうなのだろうか。東北は中央に近く、交流の歴史も長いため、完全に同化したとは言うが、同化したならば中央政府は沖縄の人々の怒りを買うような差別的政策を、東北に対しては行つていないという事だろうか。ならば何故、この時代に高橋克彦氏や、次の世代の私のように、東北の独立を問う人間が存在するのだろうか。八百年前に平泉藤原氏が持つていたであろう、「内裏の治める国」とは別の国」という意識、思想は今では無意味なものなのだろうか。読者、全ての日本人に問いたい事は尽きないが、ここでは一旦、本稿のテーマに最も沿つた一つの問いで締めよう。

『八重の桜』で東北人が受け取るべきメッセージとは何か。君主となれば是非でも忠義を貫く、徹底的な愚直さと誠実さが東北にはある。だが、二度と利用されてはならない。このドラマは一方で、一人一人が自分の頭で考え、信念を固めたならばいかなる強大な権力にも抗う東北人の姿をも活写した。それこそがまさに「蝦夷」本来の姿であり、今に至つても「中央」が奪えない、東北の地の育む精神である、と私は信じたい。

「次回予告」
このように書きだすと、結局、この娘らはサーカスをやってみたくはないのか? なかなか話が進みませんが今年も宜しく。

「あるようで実はない存在」「個人であつて個人ではない存在」である事を、忘れてはならないだろう。かつての全体主義的な国家の再生を目論むと言われ、現安倍政権は、日本人が天皇を頂点として敬うのは当然と主張するが、よく知られているように特に沖縄県においては、それは決して当然の事ではない。現地歌壇に、こんな歌がある。

シリーズ 遠野の自然 「遠野の冬」 遠野 1000 景より



遠野郷八幡宮

ここ三回は、遠野の祭りを取り上げてきたが、今回からまた「遠野の自然」に戻ることにする。

◇ 遠野の秋も良いが、冬もまた冬の楽しみがあつても良いと聞いている。しかし、岩手県のなかでも遠野の冬の寒さは特に厳しいと聞かされると、東北出身でありながらもすこぶる寒



初日の出

がりの筆者は二の足を踏んでしまう。ある知人などは、一番寒いときはマイナス二〇度にもなると脅かすが、遠野在住の方に最近の気温を聞けば、まだマイナス一〇度にもなっていないというから、いまのところは極寒というほどでもないようだ。

年明けの一月一八日以降には、不定期開催で三月ははじめまで、「遠野どべつこ祭り」という祭りがあるという。ここでは、郷土芸能あり、カッパおじさんトークショーあり、昔話などが聞けるようだ。冬には冬の楽しみ方があるのだろう。

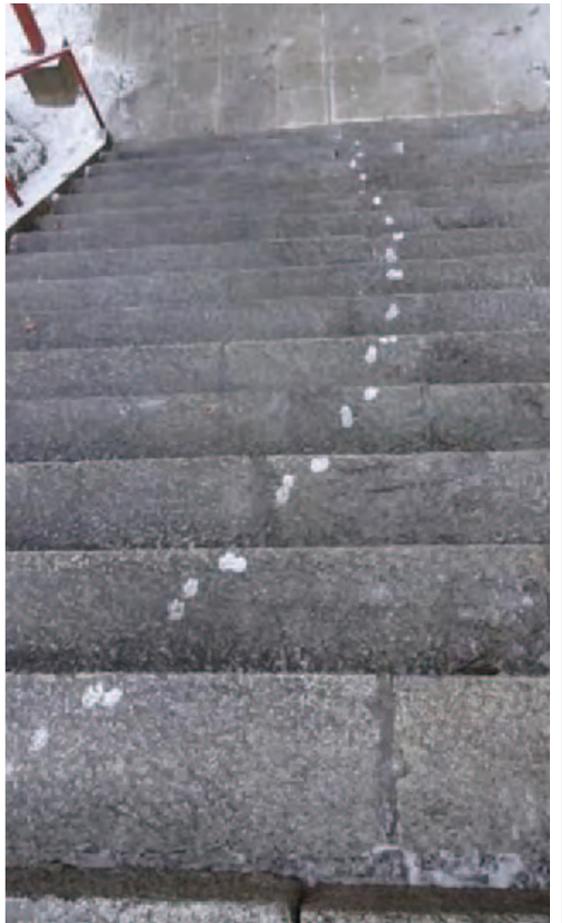
◇ 遠野の秋も良いが、冬もまた冬の楽しみがあつても良いと聞いている。しかし、岩手県のなかでも遠野の冬の寒さは特に厳しいと聞かされると、東北出身でありながらもすこぶる寒



西日を浴びる六角牛山

◇ 遠野郷八幡宮は昨年秋におじやました。その八幡宮が、すっかり雪景色である。雪かきをする側の方々は大変だろうが、見ているだけならとても美しい。

放題」もあるというので、お酒好きの筆者の心も大いに揺れる。特にこの「どべつこ」というのは賞味してみたものだ。お酒をいただけば寒さなんかどこかへ行ってしまふのだから、寒さなんて最初だけと、寒がりの自分を忘れそうになる。



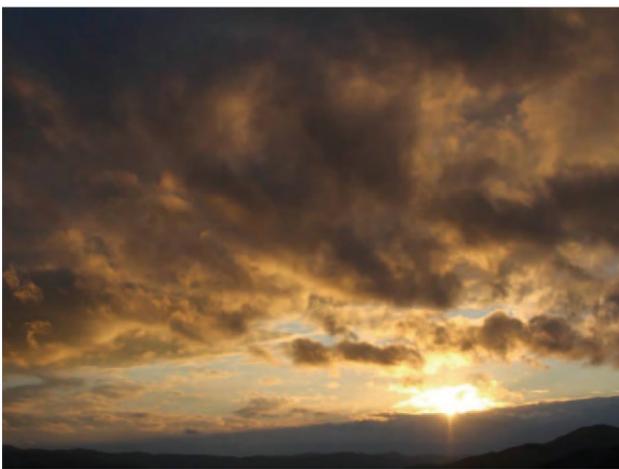
猫参拝の足跡



寒い朝の窓



手水鉢に朝日



高清水からの落陽



飛び立つゴイサギ

東北地ビール紀行 その⑤ 宮城県編

宮城県の 地ビール事情

宮城県と言えば周知のように、東北で唯一人口百万人の大都市仙台市を擁する県である。その宮城県は東北では岩手県に次ぐ四つの地ビール醸造所がある。惜しむらくは、東北では突出した人口規模を持つその仙台市に地ビール醸造所がないことである。二つの地ビール醸造所を有する盛岡市を始め、東北の県庁所在地では秋田市と福島市に地ビール醸造所があり、それぞれしっかりと地域に根付いていることや、年二回市内で開催されているオクトー



仙南シンケンファクトリーはドイツ風の建物である

J Aが運営する 地産地消の地ビール

まず宮城県南部、角田市にある「仙南クラフトビール」から。阿武隈急行の角田駅に程近い場所に、J A宮城仙南が運営する、ドイツのロマンチック街道にある建物をイメージして建てられた仙南シンケン

ファクトリー(角田市角田字流1974、TEL0224-61-1150、http://www.ja-miyagisennan.jp/ehou/1417.html)がある。仙南クラフトビールは、この仙南シンケンファクトリーの中にある醸造所で造られている。ピルスナー、ヴァイツェン、ミュンヘンラガー(ピルスナーより麦芽風味が強い)、さらにアルコール度数が高めのスタウト、それに地元で取れた古代米を副原料に使った古代米エールがある。角田産の大麦を使ったビールも期間限定で醸造される。

ハムやソーセージも自家製である他、J Aが運営しているだけあって料理に使われる食材も仙南地域のものがメインで、地産地消を意識したメニューとなっている。唯一残念なのは、この仙

南シンケンファクトリー、ビアガーデンが開設される夏の週末を除いて基本的に昼のみの営業で、夜は四名以上で予約しないと営業しないということである。もっとも、ビール好きを集めて阿武隈急行で飲みに行ってみるのもいいかもしれない。

山中の松島?

宮城県の中部、大郷町には「松島ビール」がある。松島の海岸沿いではなく、そこからずっと内陸の愛宕山という山の麓に、夢実の国(黒川郡大郷町東成田新田1-1、TEL022-359-5555、http://www.tinet.ne.jp/yumeni/)と3日帰り温泉施設がある。「松島ビール」はその中にある醸造所で造られている。運営しているのは、サブリエント製造で知られるサンケイヘルズで、経営の多角化の一環で地ビール醸造を始めたそうである。温泉は、四段になった露天風呂が特徴で、湯上りに出来たての地ビールが味わえるのがいい。ヘレス(ピルスナータイプだがよりまろやか)、バイツェン、デュンケル(濃色のビール)、ボック(アルコール度数が高めのビール)の四種があり、いずれも館内のレストランで味わえる。特徴的なのはボックで、通常のボックと違うヴァイツェン系のボックである。宮城県内では「伊達政宗

麦酒」(ヴァイツェン)、「支倉常長麦酒」(ピルスナー)、「片倉小十郎麦酒」(ケルシユ)という地ビールが売られている。戦国武将ブームもあって相応の売れ行きのようにだが、これらのビールの醸造も、現在は「松島ビール」が引き継いでいる。

「加美富士」の麓の地ビール

宮城県の北西部、加美町には「やくらいビール」がある。ここに薬菜山(やくらいさん)という山があり、その山容から「加美富士」とも呼ばれる。その麓にやぐらいリゾート(加美郡加美町味ヶ袋薬菜原1-81、TEL0229-67-5211、http://www.town.kami-miyagi.jp/yakurai-shinkou/index.html)と、日帰り温泉や宿泊施設、レストラン、プール、パークゴルフ場などが併設された複合施設があるが、この中のレストランぶな林内に「やくらいビール」の醸造所がある。運営しているのは第三セクターの薬業振興公社で、このレストランも手作りソーセージや地元産の食材を使った料理など、地産地消のメニューが揃う。ビールは、ピルスナー、ヴァイツェン、デュンケルの三種である。ちなみに、やくらいビールのあるレストランぶな林と、日帰り温泉施設やぐらい薬師の湯は隣接している

ので、夢実の国同様、やはり湯上がりに出来たて地ビールを楽しむことができ。これも夢実の国も、車でないと行きにくいのが悩ましいところではあるのだ。

地ビールならぬ「地発泡酒」

宮城県の北部にある大崎市鳴子温泉にある鳴子温泉郷は県内屈指の温泉地だが、そこからさらに国道108号線で秋田方面に向かうと鬼首(おにこうべ)高原がある。地熱発電所や間歇泉で知られるが、そこにリゾートパークオニコウベ(大崎市鳴子温泉鬼首字小向原9-55、TEL0229-86-2111、http://www.onkoube.com)と、スキー場やホテル、キャンプ場、日帰り温泉施設、レストランからなるリゾート施設がある。このレストラン鳴子の風には、地ビールならぬ地発泡酒「鳴子の風」がある。地ビールと銘打たないのは、酒類製造免許の関係である。酒類製造免許では、法定製造数量という年間の製造数量の最低ラインが決められている。このうちビールは60kLだが、60kLと言えば35mL缶にして実に17万缶超という数量である。これだけのビールを売りさばくというのは大変なことである。一方、発泡酒ではこの法定製造数量は6kLとビールの10分の1で

ある。「鳴子の風」はこの発泡酒の製造免許に基づいて醸造されているので、厳密には地ビールではないのである。とは言え、山ぶどうや地元「ゆきむすび」など、地元の素材をふんだんに使った発泡酒は、まさに「地発泡酒」である。定番は「高原ラガー」と、この「山ぶどう」「ゆきむすび」だが、これら以外にパイナップルを使った発泡酒など、季節限定のビールが登場する。ここにも日帰り温泉施設すば鬼首があり、湯上がり「地発泡酒」が楽しめるものなのだが、ただ、このレストラン鳴子の風も、仙南シンケンファクトリー同様、昼間のみの営業なので、夜にゆっくり楽しみたいという向きは、ホテルオニコウベに宿泊して、というのがベストの選択になるかもしれない。

仙台市内で 宮城の地ビールを 飲めるところ

これまで見てきたように、宮城県内の地ビール、地産地消を意識した作りや、温泉に併設された施設が多いところに特徴があると言えそうである。それぞれの場所を訪れた時にゆっくり楽しみたいところである。先述のように、仙台市には残念ながら地ビールはないが、今まで紹介してきたものうちのいくつかを飲める店はある。まず、Restaurant waon(レストラン・ワオン、仙台市青葉区一番町1-18、青葉パークビルB1、TEL022-395-7496、http://waon-sendai.com/)では「やぐらいビール」三

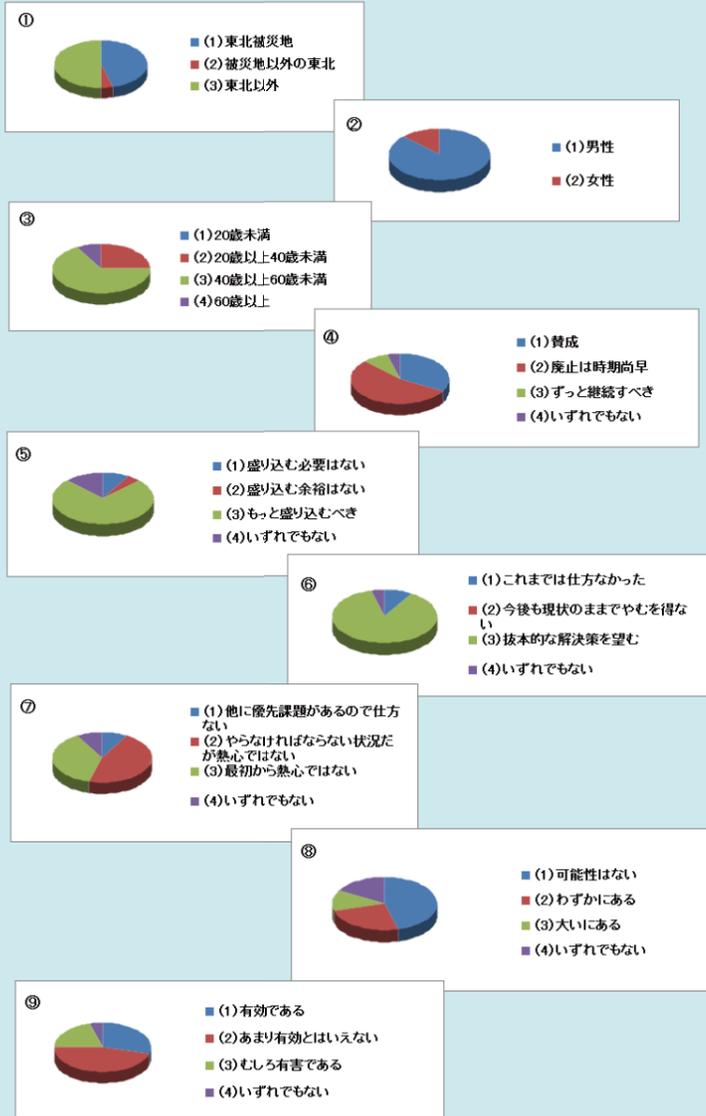


夢実の国では地ビールと温泉が楽しめる

種が樽生で飲める。和醸良酒〇たけ(まるたけ)(仙台市青葉区大町2-41、グランドレイユ大町1F、TEL022-266-5541、http://sake-marutake.com)とsk7(サカナ)Bistro & Bar(仙台市宮城野区榴岡1-2-37、ダイワロイネットホテル1F、TEL022-292-5088、http://www.sk7.jp)では「伊達政宗麦酒」が樽生で飲める。また、ダイニングPab Gasthof MARIA(ガストホフ・マリア)(仙台市太白区西多賀4-1-1、TEL022-244-4619)では「松島ビール」三種が樽生で飲める。他に、瓶で飲める店もあるが、詳細は拙ブログ(http://blog.livedoor.jp/anagmas/archives/51698920.html)を参照したければ幸いである。

第19号 ネットアンケート集計結果 アベノミクスと東北復興

No.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	11
	(2) 被災地以外の東北	1
	(3) 東北以外	12
②	性別	
	(1) 男性	21
	(2) 女性	3
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	6
	(3) 40歳以上60歳未満	16
	(4) 60歳以上	2
④	復興特別法人税前倒し廃止について	
	(1) 賛成	8
	(2) 廃止は時期尚早	13
	(3) ずっと継続すべき	2
	(4) いずれでもない	1
⑤	景気浮揚策に東北復興事業を盛り込むべきか	
	(1) 盛り込む必要はない	2
	(2) 盛り込む余裕はない	1
	(3) もっと盛り込むべき	18
	(4) いずれでもない	3
⑥	東北復興事業と復興事業雇用政策	
	(1) これまでは仕方なかった	2
	(2) 今後も現状のままでやむを得ない	0
	(3) 抜本的な解決策を望む	21
	(4) いずれでもない	1
⑦	アベノミクスは東北復興に熱心か	
	(1) 他に優先課題があるので仕方ない	2
	(2) やらなければならない状況だが熱心ではない	11
	(3) 最初から熱心ではない	9
	(4) いずれでもない	2
⑧	アベノミクスで東北復興事業が中心課題になるか	
	(1) 可能性はない	11
	(2) わずかにある	6
	(3) 大いにある	3
	(4) いずれでもない	4
⑨	アベノミクスは東北復興に有効か	
	(1) 有効である	7
	(2) あまり有効とはいえない	11
	(3) むしろ有害である	5
	(4) いずれでもない	1



今回のテーマは「アベノミクスと東北復興」。

政権発足から約一年経過し、東北復興に対する姿勢も大分明らかになってきたので、アベノミクスが東北復興にどのように影響を与えるかについてお聞きしました。回答者数24名。

まず、今回の特徴は、被災地の方のご回答が11名と高かったことです。

「復興特別法人税前倒し廃止」は、「廃止は時期尚早」が約54・2%、「賛成」が約33・3%と割れました。「景気浮揚策に東北復興事業を盛り込むべきか」は、「もっと盛り込むべき」が圧倒的で75%。復興が進まないのは人出不足という声もあつての質問、「東北復興事業と復興事業雇用政策」については、「抜本的な解決策を望む」が圧倒的で87・5%。「アベノミクスは東北復興に熱心か」は、「やらなければならない状況だが熱心ではない」が約45・8%、「最初から熱心ではない」が約37・5%、合わせて「熱心でない」は約83・3%。「アベノミクスで東北復興事業が中心課題になるか」は「可能性はない」が約45・8%、「わずかにある」が25%。「アベノミクスは東北復興に有効か」は、「あまり有効とはいえない」が約45・8%、「有効である」が約29・2%、「むしろ有害である」が約20・8%と意見が割れました。

編集後記

今回の「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」の宮城取材での吹雪にはほんとにまいった。

事前に天気予報はチェックしており、雪予報はなかったのが安心していたが、予報はあてにならないことを思い知った。

朝方、ものすごい風の音が目覚め、カーテンを開けて、ほんとに驚いた。

猛烈な吹雪。いったい何が起きたのか、寝ぼけ頭ではなかなか整理がつかない。幸い、すぐに吹雪は止んだが、一方、被災地はまだ大変だろうなと思った。

冬に雪はつきものだし、たかが一〇センチとか一五センチの雪では大騒ぎする方がおかしいかもしれないが、この雪で輸送は確実にストップするはずで、それは遅れている復興作業に支障をもたらすのも事実だ。

最近、復興に関するニュースもめっきり減ったが、もっと報道して欲しい。そうすれば、まだみんなが3・11を忘れていないというメッセージにもなる。

今年三月でちょうど三年目を迎える。もうすぐだ。当新聞でも何度も指摘しているが、この三年目というのが、復興が進展するかどうかの分水嶺でもある。忘れられないという掛け声だけでなく、現実に復興推進に貢献できる活動に尽力していきたいと思う。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ ✕切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先
- (郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タブロイド新聞【東北復興】宛
- (メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています